68

氏名(生年月日)	小内　友紀子（コウチ　ユキコ）
本　　籍	
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2369号
学位授与の日付	平成18年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**嫌色素性腎癌と腎オンコサイトーマにおける免疫組織化学染色およびコロイド鉄染色に関する検討**
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌　第76巻　第1号　16-23頁　2006年
論文審査委員	（主査）教授　東間　紘 （副査）教授　小林　槇雄，小早川隆敏

論文内容の要旨

〔目的〕

嫌色素性腎癌と腎オンコサイトーマはどちらも遠位尿細管，集合管由来の腫瘍といわれており組織学的に類似しているため，症例によっては診断に苦慮する場合がある．嫌色素性腎癌の予後は良好といわれているが悪性腫瘍であり，それに対して腎オンコサイトーマは良性腫瘍であるため鑑別診断は重要であり，より簡便な手法での鑑別が求められている．

今回我々は免疫組織化学およびコロイド鉄染色での嫌色素性腎癌と腎オンコサイトーマの染色性の違いを検討したので報告する．

〔対象および方法〕

1974年1月～2001年2月の間に当院泌尿器科において腎摘出術および腎部分切除術を行った腎腫瘍796例のうち，HE染色を用いて病理組織学的に嫌色素性腎癌と診断された15例(1.8%)，腎オンコサイトーマと診断された8例（1.0%）を対象として検討を行った．通常のHE染色のほか，CD68，peanut agglutinin（PNA），dolichos biflorus agglutinin（DBA），Leu M1（LM1），コロイド鉄染色を行った．免疫染色の結果は各群間においてχ^2検定で行い，$p<0.05$を有意差と判定した．

〔結果〕

PNA染色は嫌色素性腎癌で2例（13.3%）が，腎オンコサイトーマで4例（50%）が陽性であった．DBA染色は嫌色素性腎癌で8例（53.3%）が，腎オンコサイトーマで5例（62.5%）が陽性であった．CD68は嫌色素性腎癌では15例中12例（80%）が，腎オンコサイトーマでは8例中1例（12.5%）が陽性であった．LM1は嫌色素性腎癌では15例中2例（13.3%）が陽性であり，腎オンコサイトーマではすべて陰性であった．以上よりCD68染色のみに有意差を認めた．嫌色素性腎癌では15例中すべてがコロイド鉄染色陽性であったのに対し，腎オンコサイトーマでは陽性は4例（50%）であった．

〔考察〕

今回腫瘍間質に観察されたCD68陽性細胞は腫瘍細胞そのものではなく泡沫様マクロファージであり，これは腫瘍に伴う二次的な反応を示唆するものと考えられた．嫌色素性腎癌と腎オンコサイトーマとのCD68抗原の発現の相違は，悪性である嫌色素性腎癌にマクロファージが多く浸潤し，良性である腎オンコサイトーマでは浸潤が少ないという癌における免疫反応を示唆している可能性がある．

〔結論〕

マクロファージのマーカーであるCD68陽性率は，腎オンコサイトーマに比べ嫌色素性腎癌で有意に高かった．コロイド鉄染色は嫌色素性腎癌全例で，腎オンコサイトーマで8例中4例（50%）が陽性を示したが，腎オンコサイトーマでの陽性例はすべてがfocal and weak，fine dustlike patternを示した．CD68を用いた免疫組織化学

染色とコロイド鉄染色は嫌色素性腎癌と腎オンコサイトーマの鑑別の補助的な情報として役立つと思われた.

論 文 審 査 の 要 旨

悪性腫瘍である嫌色素性腎癌と良性腫瘍である腎オンコサイトーマはどちらも遠位尿細管，集合管由来の腫瘍といわれており組織学的にも類似しているため，症例によっては診断に苦慮することがある．したがって本研究は，この両者を組織学的に鑑別することを目的として免疫組織学的およびコロイド鉄染色における染色性の違いにつき検討したものである.

1974年1月から2001年2月までに泌尿器科で手術治療を行った腎腫瘍796例のうち，嫌色素性腎癌と診断された15例（1.8%）と腎オンコサイトーマと診断された8例（1.0%）を対象に，通常のHE染色のほかCD68, PNA, DBA, LM1などの免疫染色およびコロイド鉄染色を行ってその染色性について検討した.

その結果，マクロファージのマーカーであるCD68の陽性率は嫌色素性腎癌において有意に高く，この両者の鑑別に役立つと考えられた．またコロイド鉄染色も嫌色素性腎癌全例に陽性であり，その染色パターンにおいて腎オンコサイトーマとの間に明らかな差が認められたことから，CD68を用いた免疫染色とコロイド鉄染色は，この両腫瘍の鑑別に有用であり，臨床病理学的に有用性の高い論文である.

69

氏名(生年月日)	飯塚 淳平（イイヅカ ジュンペイ）
本籍	
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2370号
学位授与の日付	平成18年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**後天性嚢胞性腎疾患における増殖性嚢胞の組織学的分類—多段階発癌モデルとしての透析腎癌—**
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌　第76巻　第1号　24-30頁　2006年
論文審査委員	（主査）教授　東間　紘 （副査）教授　小田　秀明，亀岡　信悟

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕

透析期間が長期間に渡ることで後天性嚢胞性腎疾患（ACDK: acquired cystic disease of the kidney）から腎癌（透析腎癌）が発生することが知られている．この発癌には多段階発癌の過程をとると考えられているが，これまで病理学的に癌化過程を類型化した報告はない．本研究では透析腎癌の癌化過程における多段階性を検討することを目的として，まずACDKの増殖性嚢胞上皮を病理学的に分類した．それらの発生頻度を解析することにより多段階発癌の過程の試案を作成した.

〔対象および方法〕

外科的に切除した20例のACDKを伴う透析腎癌について，各症例約100嚢胞，計1,752嚢胞を解析した．解析に先立ち増殖性嚢胞300部位を無作為に鏡検して嚢胞上皮の組織分類を作成した.

〔結果〕

単層嚢胞上皮をI型として，平坦な細胞のIa型，立方型のIb型に分類した．増殖性嚢胞上皮は，嚢胞上皮が2～3層に多列化したII型，血管増生の有無を問わず乳頭状に増殖するIII型，上皮細胞間で架橋を形成するIV型とした.